

ひとはひとりひとり違う

女と男の違いなんて吹き飛んでしまおうくらい、個人個人はみな違う

違いを大事にして、ひとりひとりが幸せをつかめる社会をつくろう

これが男女共同参画の原点です。

でも今日は、原点から離れて、まず人口と経済の話をして、日本で起きた大きな変化を知っていただくために。

話は最後に男女共同参画に戻りますが、それまで経済のお話にお付き合いください。

20代・30代女性のうち働いている人の割合

100%
90%
80%
70%
60%
50%

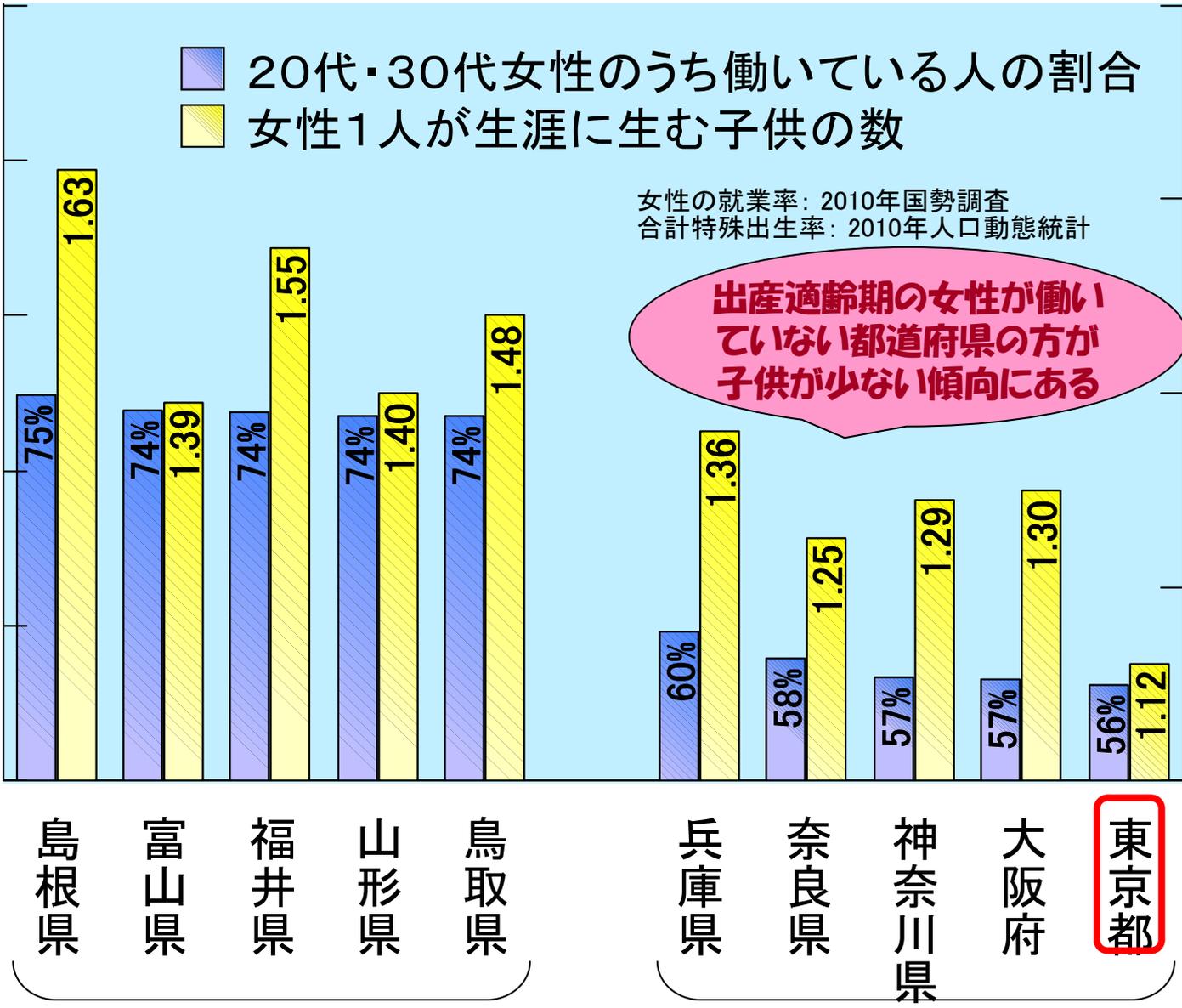
20代・30代女性のうち働いている人の割合
女性1人が生涯に生む子供の数

女性の就業率：2010年国勢調査
合計特殊出生率：2010年人口動態統計

出産適齢期の女性が働いていない都道府県の方が子供が少ない傾向にある

1.80
1.60
1.40
1.20
1.00

合計特殊出生率

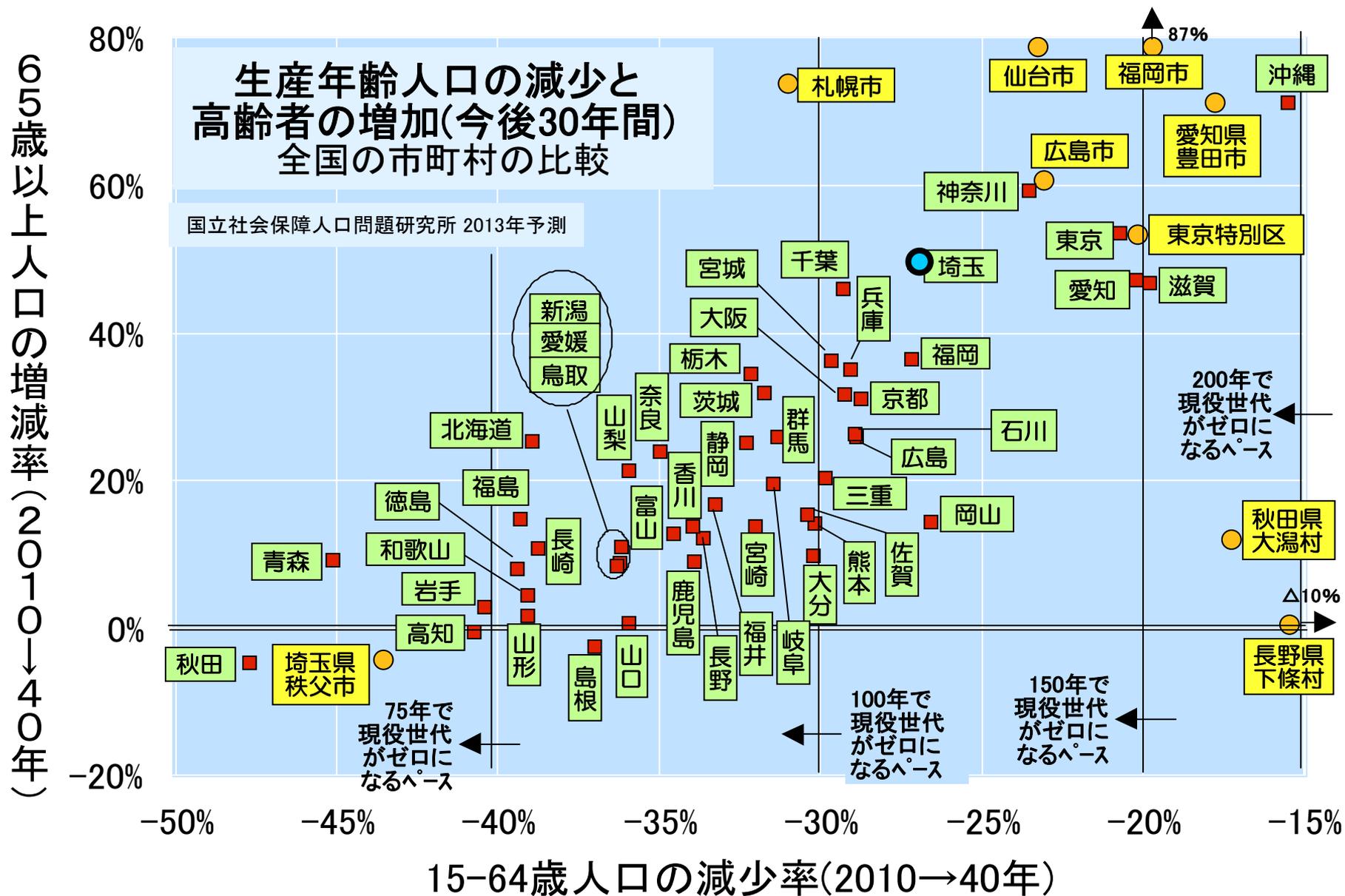


20・30代女性が働く都道府県トップ5

20・30代女性が働かない都道府県トップ5



現役世代の減少と高齢者の増加³



首都圏一都三県で起きてきたこと⁴

過去10年間の国勢調査の実数 (国立社人研が未回答者分を補正)

首都圏内在住者(外国人含む) : 2000年→10年 +220万人

100年で人口1.5倍増のペースの順調な増加 ↑

実は現役世代も子供も減少しており、高齢者のみが激増していた...

0-14歳人口の増減:

	↓絶対数	↓増減	
2000年 4.5百万人→2010年	4.4百万人	△4万人	△1%

15-64歳人口の増減:

	↓絶対数	↓増減	
2000年 24.1百万人→2010年	23.9百万人	△19万人	△1%

65歳以上の人口:

	↓絶対数	↓増減	
2000年 4.8百万人→2010年	7.3百万人	+251万人	+52%

↑その中の75歳以上の人口:

	↓絶対数	↓増減	
2000年 1.8百万人→2010年	3.2百万人	+133万人	+72%

首都圏一都三県で今起きていること⁵

(人口流出入を見込んだ、国立社会保障・人口問題研究所の予測)

首都圏内在住者(外国人含む)：2010年→20年 +7万人

増加というよりはほぼ横ばい ↑

155年で現役世代がゼロ! になるという、不意打ちのような減少

0-14歳人口の増減:

2010年	4.4百万人	→	2020年	4.0百万人	↓絶対数	△39万人	↓増減	△9%
-------	--------	---	-------	--------	------	-------	-----	-----

15-64歳人口の増減:

2010年	23.9百万人	→	2020年	22.3百万人	↓絶対数	△154万人	↓増減	△6%
-------	---------	---	-------	---------	------	--------	-----	-----

65歳以上の人口:

2010年	7.3百万人	→	2020年	9.3百万人	↓絶対数	+201万人	↓増減	+27%
-------	--------	---	-------	--------	------	--------	-----	------

↑その中の75歳以上の人口:

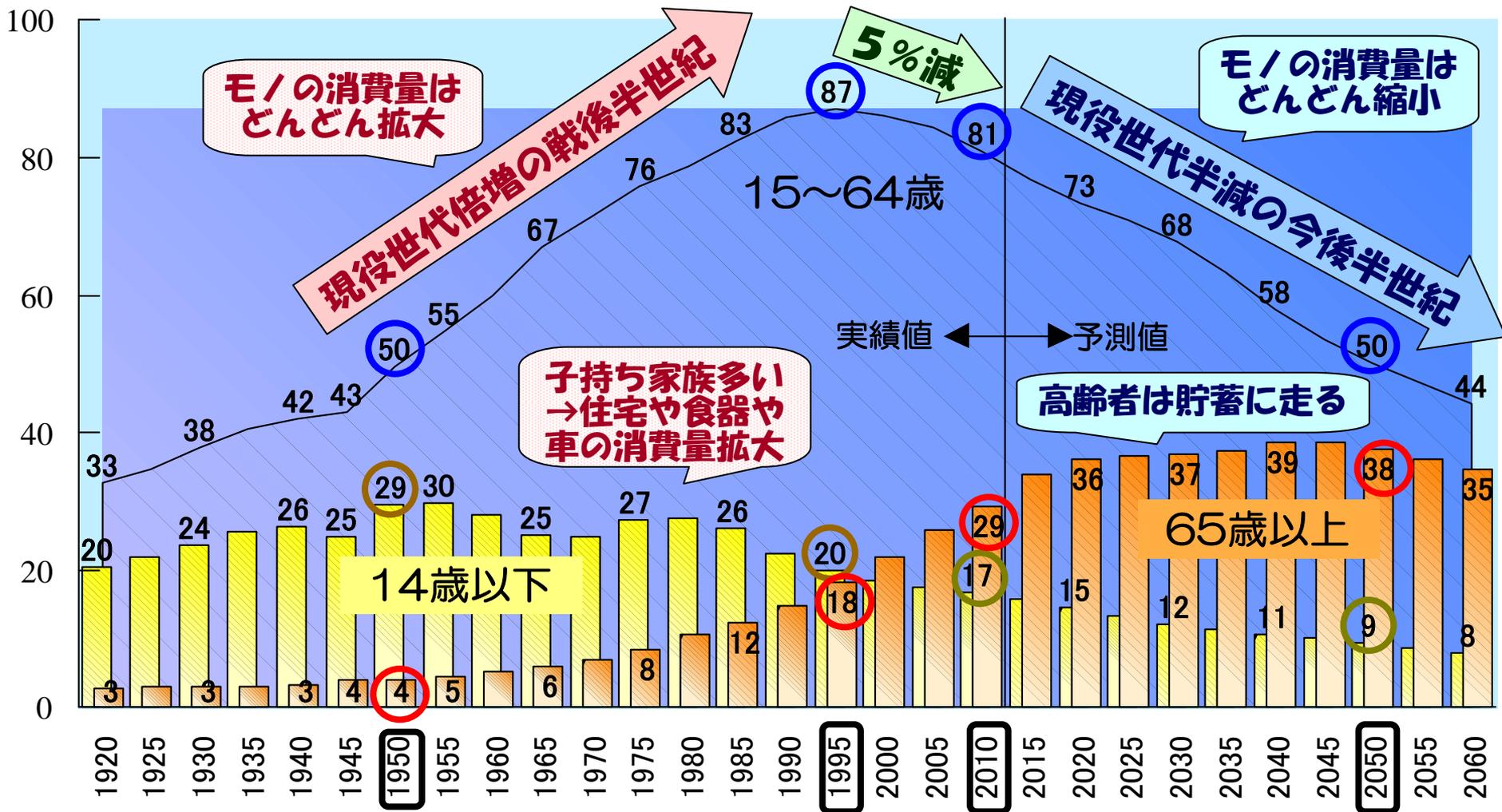
2010年	3.2百万人	→	2020年	4.8百万人	↓絶対数	+165万人	↓増減	+52%
-------	--------	---	-------	--------	------	--------	-----	------

逆落としに減っていく現役世代⁶

年齢階層別にみた日本の在住者数(1920-2060)

百万人

資料: ~2010年は国勢調査(1945・2005・2010は補正值)、2015年~は国立社会保障・人口問題研究所2012年中位推計



日本と東京の本当のピンチ

× 日本の課題は景気回復、デフレ脱却、円高対策、領土防衛だ

！ このまま行けば、60年後には子供が、100年後には現役世代も消滅、高齢者だけの国になる

！ 少子化こそ、景気や領土どころではない最大の課題

× 少子化が起きているのは女が社会進出したせいだ

！ 若い女性が結婚しても働き続けている県ほど、出生率は高い(神奈川県は全国的にみて逆を行っている)

！ 高度成長以前の日本には専業主婦はほぼいなかった

× 子育てよりも仕事が重要、会社の利益こそ重要だ

**！ 家庭より仕事を優先する社会だからこうなった
→ 男性も会社も、仕事より家庭生活を優先する
日本にならなければ、この国に未来はない**

女性役職者を意図的に増やそう ⁸

- × 不況で人手が余っている日本では、男性候補だけでも余っている
- ←→ 多年の少子化で年々新卒者が減っているのに本当に人手は余っているのか？
- ←→ 女性の収入の増加こそが景気拡大策では？
- × 出産、子育てに時間を取られる女性に、役職者は勤まりにくい
- ←→ 長時間労働に耐えた人間が役職につくというシステムは、組織目的からみて合理的か？
- ←→ 男性の出産や子育て関係の労働を免除してきた帰結が、今の日本の人口減少なのでは？
- × 女性役職者増で、少子化→人口減少に拍車がかからないか？
- ←→ 役職者 = 男という体制の下、過去30年間に破滅的な少子化が進んだのをどう考える？

就業者数は生産年齢人口に連動¹⁰

「失われた10年」を経てきたのか？

百万人

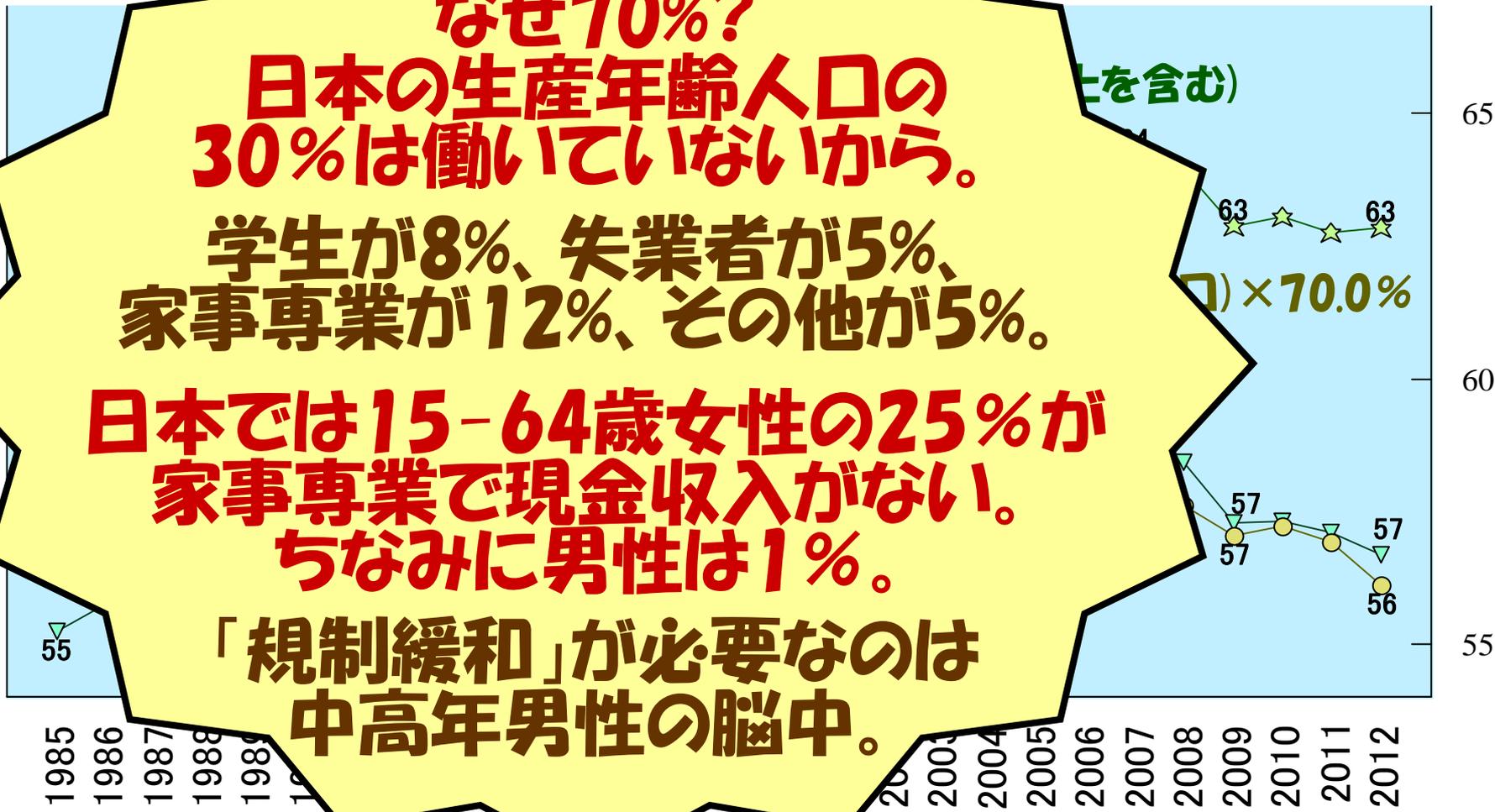
なぜ70%？

日本の生産年齢人口の30%は働いていないから。

学生が8%、失業者が5%、家事専業が12%、その他が5%。

**日本では15-64歳女性の25%が家事専業で現金収入がない。
ちなみに男性は1%。**

**「規制緩和」が必要なのは
中高年男性の脳中。**



各年10/1現在

日本では、現役世代の減少が 生産ではなく消費を下げている

- ☆ 現役世代が減っているなので、労働者も減っている
 - ところが日本は世界で一番、工場の機械化・自動化が進んでいるので、労働者が減っても生産は落ちない
- ★ 現役世代が減っているなので、労働者も減っている
 - その分、企業が払う人件費の総額(雇用者報酬)も減る
 - その分、現役世代を顧客にした商品の売り上げも減る
 - ... 車、住宅、衣類、家具、食品、いろいろなものが頭打ちに
- ☆ それでも生産を落とさない商品は、値崩れしていく
 - そのことを「デフレ」と呼んで日銀のせいにする
- ★ 実は一部の高齢者には貯金がたくさんあるのだが、そうした人に限って死ぬまでお金を使おうとしない...

女性が働けば経済は下げ止まる ¹²

百万人

120

過去の実績 今後の予測

15~64歳の人口
(国勢調査)

仕事を持つ人の数
(国勢調査)

放っておけば
220万人も
減少!

15~64歳の人口
(政府研究所予測)

仕事を持つ人の数
(藻谷試算)

15~64歳の家事専業女性
約1,000万人の、5人に1人
が働き出せば補える!



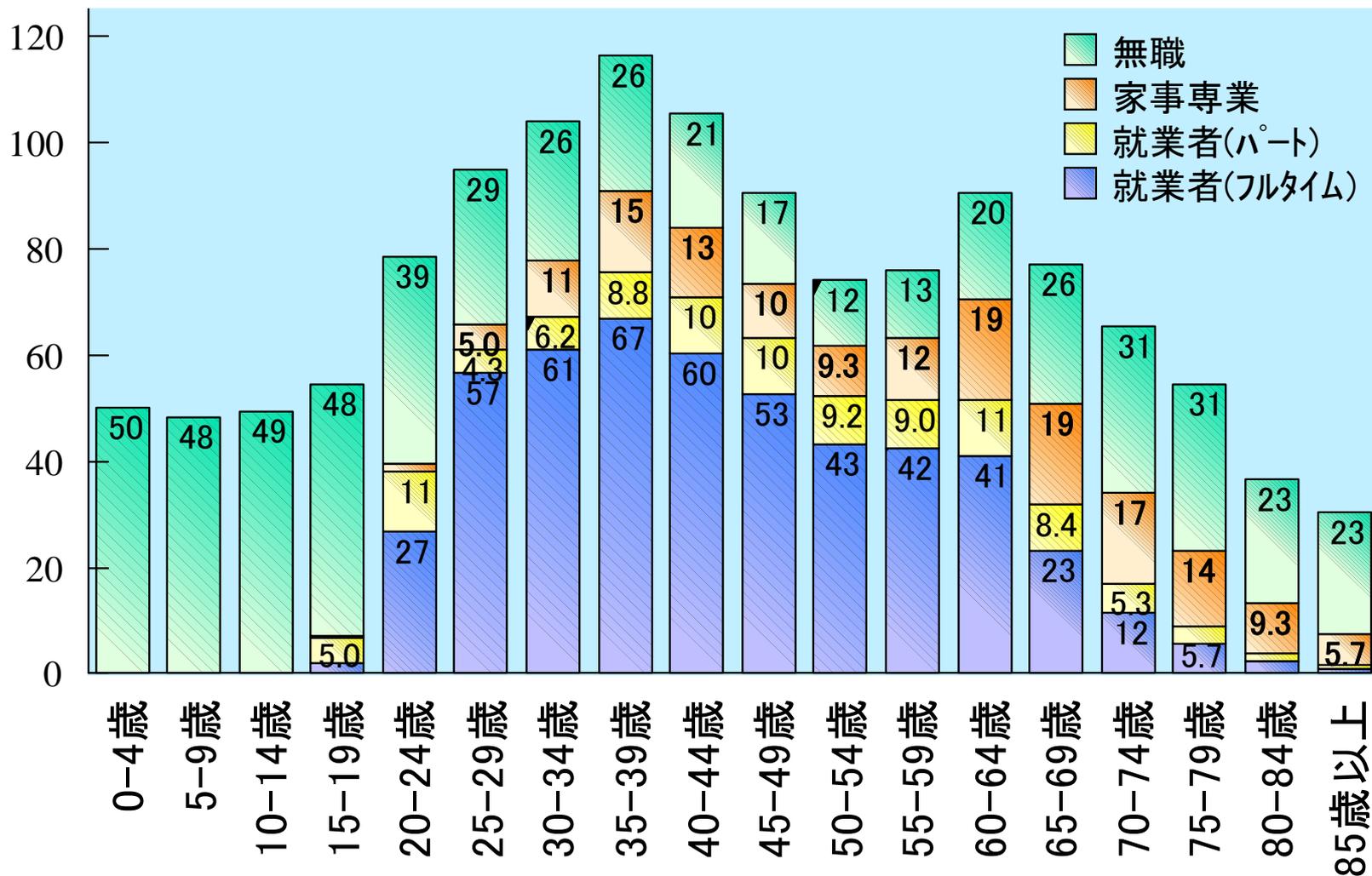
景気よりもワーク・ライフ・バランスの回復 ¹³

- **問題は「国際競争」ではなく「日本人の加齢」**
 - 地域間格差拡大ではなく大都市も急速に高齢化
 - **「少子高齢化」ではなく「現役世代の減少」**
 - 「出生率低下」ではなく「親世代の絶対数の減少」
 - **「労働力の不足」ではなく「消費者の不足」**
- 経済再生の鍵は「次世代を産み旺盛に消費する現役世代のワーク・ライフ・バランス回復」。つまり、
- ① 女性就労の促進と男女間賃金格差解消
 - ② 多世代同居→退職高齢男性による家事分担
 - ③ 「値上げし賃上げできる商品・サービスへの移行」
＝「低価・大量・少種」から「高価・少量・多種」へ

東京の経済活性化は女性就労から¹⁴

万人

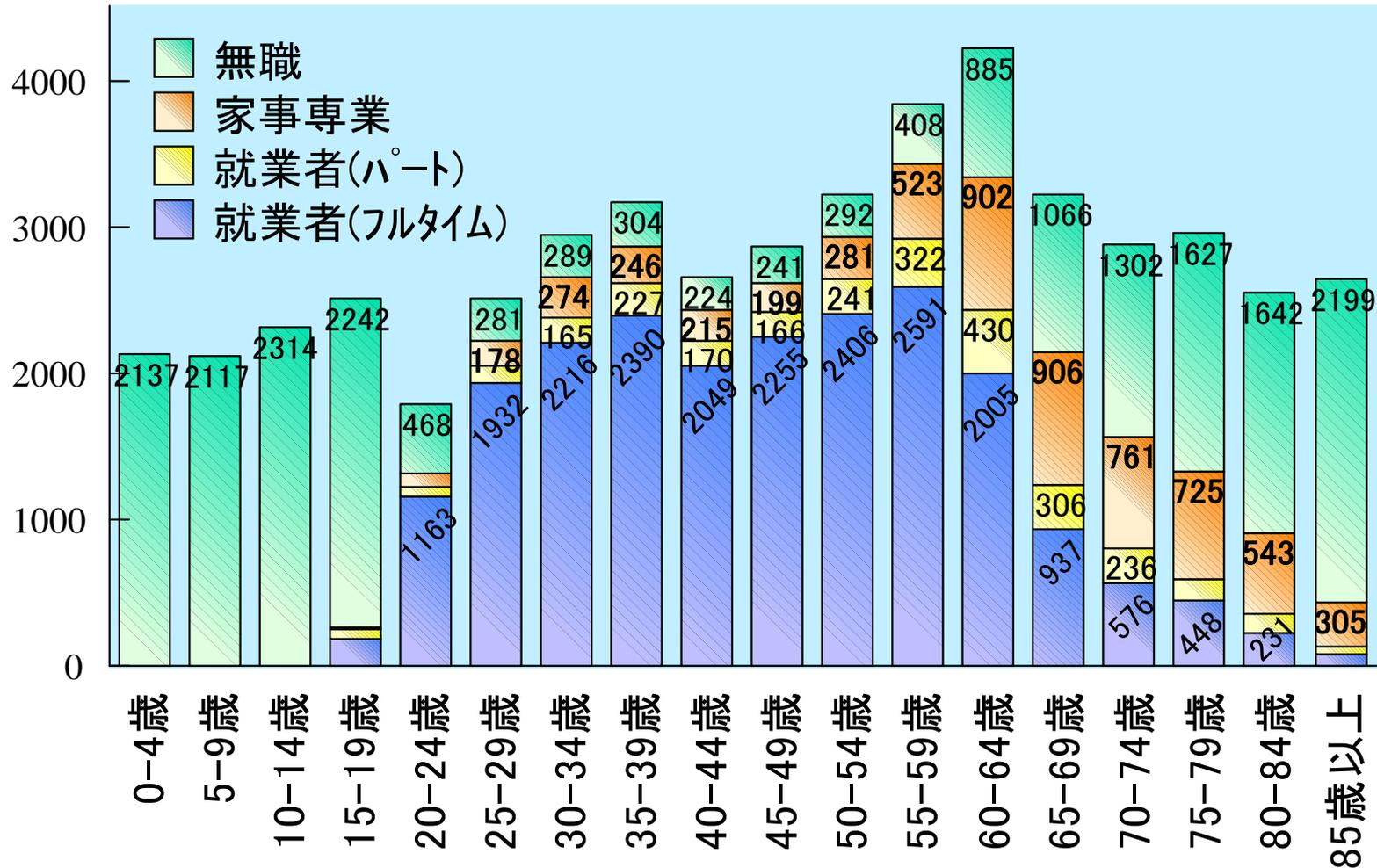
東京都の人口の中身 (2010年国勢調査)



女性が働く町はこんなに違う

人

倉吉市の人口の中身 (2010年国勢調査)



日本経済再生の鍵：女性就労促進¹⁶

女性の就労を増やすことで：

- ・ 家計収入が安定し、保育所を利用でき、出生率が上がる
- ・ 家計所得が増え、税金が増え、年金も安定する
- ・ 女性の収入が増え、モノ消費が増え、消費税収も増える

女性経営者を増やすことで：

- ・ 消費者の感性に対応した商品を出せる企業が増える
- ・ 客を軽んじ自分の権威にこだわる類の男性経営者を減らせる

しかもコストはない：

- ・ 外国人受入と違い教育コストは低く、福祉コストも増えない
- ・ 生きがいのある元気な日本人が増える

地域活性化の鍵：女性経営者増加

日本はモノ余り・カネ余りの高度消費社会 → 客はバブル期までとは別人種 → 欲求が高度化、抽象化、多様化

→ 自分自身が客としてのセンス・能力を磨いていない人間（豊かさを知らない人間）にこれからの経営はできない

ところが多いの地方では、客の気持ちに無関心な高齢の男性が、30年前のままの感覚でトップを取り続けている → そのために客が逃げ、経済の衰退が著しい

地域活性化のためにいま一番必要なのは、地域の様々な主導的立場から、その任にない人や団体を退場させ、新しい人材や団体に厳しい役割を与えて練成していくこと

必要なのは、性別年齢を問わない地域の人材力の総結集 → 結果として必ず、女性が地域づくりの前面に出てくる

障害は男の側の「人格形成不全」

- ・ **男女共同参画の最大の障害は、女性への侮いが染み付いた、一部男性の存在**

彼らにして見れば：

- ・ 男の方が、より能力のある女性よりも地位を得やすい
今までの世の中の仕組みは、ライバルが減って好都合
- ・ 「しっかりした個を確立し、集団に頼らない本当の自信を持つ」ことができていないので（人格形成不全）...
→自分が「男であること」「女ではないこと」という、個性とはいえない、大ざっぱなものに、自分自身の心の支えを頼ってしまっている

女性側にも求められる課題克服

- **男社会のシステムに浸った多くの女性の、経験不足と、主張の弱さ、受身の態度**
- 「女の敵は女」というさみしい状況 - がんばる同性を支援できない心の貧しさ
- **結局は、腹を据えて表に立ち、批判を堂々と受ける女性の増加が、世の中を変える**

経営者/団体トップ層へのご忠言²⁰

× 若い者は根性が足らん、景気が回復すれば乗り切れると信じる

←→ 景気回復(実は現役人口増加)が企業戦略の不在を糊塗してくれた時代は二度と来ない。

根性ではなく理性、高度成長へのノスタルジーではなく未来に生き残っていく勇気が必要。

× 女は使えない、女はすぐ辞める、女の給料は低くていい、と信じる

←→ 女性を使えない、女性が辞めていく、女性にいい給料を払えない組織からつぶれていく。

× 収入減を人件費カットと労働強化でしのぐ

←→ 値上げできる商品・サービスを開拓し、高い給料に見合う力のある部下を育て、賃上げで地域市場を、時短で地域の出生を拡大する。

退職年齢に達した世代への期待²¹

× まだまだ若い者に負けず、企業経営者としてばいばいと働く

←→ 働く若い女性の代わりに家事を引き受け、余った時間は心豊かに遊び、貯金を地域内できれいに使い切り、後の世代に雇用と文化と、老後はこう暮らすんだという手本を残す

× 地域社会のリーダーとして、生き生きと活動する

←→ 人に指図せず、権限闘争、路線闘争もせず、人目につかないところで黙々と世間さまのお役に立ち、一隅を照らす存在になる

× 世の中の根本の誤りを正し、日本社会を正しい方向に導く

←→ 口よいも手を動かして身近な人の役に立ち、地域と親族から愛され惜しまれる人となる